

第11回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール受賞者一覧表

〈農林水産大臣賞〉

◎小<sup>こ</sup>林<sup>はやし</sup>滋<sup>しげ</sup>幸<sup>ゆき</sup> 50歳

〒366-0814 埼玉県深谷市

◎JA北高 電照菊研究会

〒859-0100 長崎県北高来郡

(代表者 <sup>おおたにとらじ</sup>大谷虎次

〈農林水産省生産局長賞〉

◎田<sup>た</sup>中<sup>なか</sup>勲<sup>いさお</sup> 59歳

〒362-0043 埼玉県上尾市

◎林<sup>はやし</sup>富<sup>とみ</sup>造<sup>ぞう</sup> 62歳、林<sup>はやし</sup>房<sup>ふさ</sup>子<sup>こ</sup>

〒444-2814 愛知県東加茂郡

◎河<sup>かわ</sup>野<sup>の</sup>鉄<sup>てつ</sup>博<sup>ひろ</sup> 46歳、河<sup>かわ</sup>野<sup>の</sup>常<sup>つね</sup>子<sup>こ</sup>

〒501-3303 岐阜県加茂郡

◎喜<sup>しゅう</sup>蒲<sup>ふ</sup>正<sup>まさ</sup>行<sup>ゆき</sup> 50歳

〒840-0541 佐賀県佐賀郡

〈(財)日本花普及センター会長賞〉

◎中<sup>なか</sup>辻<sup>つじ</sup>栄<sup>えい</sup>治<sup>じ</sup>

〒638-0001 奈良県吉野郡

◎石<sup>いし</sup>田<sup>だ</sup>律<sup>りつ</sup>恵<sup>え</sup>

737-0833 広島県呉市

◎阿<sup>あ</sup>部<sup>べ</sup>雅<sup>まさ</sup>志<sup>し</sup>

〒771-1401 徳島県板野郡

◎森<sup>もり</sup>崇<sup>たかし</sup>

〒769-2301 香川県大川郡

◎高<sup>たか</sup>全<sup>もく</sup>義<sup>よし</sup>邦<sup>くに</sup>

〒819-0202 福岡県福岡市

## 農林水産大臣賞 受賞者



小林 滋 幸 御夫妻

---

出品財 経営（花き技術・経営）

小林 滋 幸（カランコエ）

埼玉県深谷市

---

小林氏の鉢物経営の特徴は、栽培品目をカランコエ一つに絞り、しかも鉢規格も3号単一にして温室のシステム的な利用により大量生産を行い、高い収益率を確保していることである。

小林氏が、温室を採穂用の親株育成温室、挿し木・苗育成用温室、開花・出荷用温室の3つの機能に分け、挿し木・苗育成用温室は年6回転、開花・出荷用温室は年4回転していることは注目すべきことである。温室を機能分化させたことは、それぞれの温室に適した設備だけ備えればよいので施設のコスト低減に結びついている。さらに、この機能分化は、挿し木・苗育成用温室では手かん水によるきめ細やかな管理を、開花・出荷用温室では、マット吸水によって全く手かん水の必要のない省力的な管理を可能にし、高品質・低コスト生産にも同時に結びつけている。

これらは、長年にわたって鉢花生産を行う中で、均一で高品質な鉢花を効率よく生産するための技術を研究してこられた成果であり、賞賛に値するものである。

カランコエの周年生産体系を確立し生産拡大を行うにしたい「小林花卉のカランコエ」が知られるようになり、同氏は「あたまのよくなる花」を商標登録して消費者に親しみやすい独自ブランドを確立している。鉢を自らデザインしてオリジナル鉢による差別化を図るとともに、そのまま花店の店頭で並べることができるように工夫された出荷箱を用いている。この出荷箱は、産業廃棄物になるプラスチックを避けて段ボール箱製にし、環境保全にも配慮している。

こうした市場、小売店、消費者を視野に置いた販売戦略によって大きな消費を開拓し、カランコエの大量生産を可能にしている。

同氏は、昭和60年代にいち早く雇用労力を活用し始めたが、雇用を安定的に確保するために、周年生産体系確立を図る契機になっている。このような雇用される人の立場を考えて、休息施設、トイレの整備など労働環境にも配慮した施設整備にも努めている。

同氏は、農協の合併を契機に深谷市農協鉢物研究会の結成に参加し、会長に就任している。また、埼玉県内の鉢物栽培技術研究組織であるFMC（フラワーメイトクラブ）の創立時から積極的に携わり、会の活動に大きく貢献している。これらの活動をとおして地域の花き生産や若い生産者の育成にも貢献している。

以上のように小林氏のカランコエ鉢物経営は、高い生産技術と経営戦略に基づいた優れた経営であり、県内花き生産農家の模範となるものである。

（推せん：さいたまの花普及促進協議会）



J A 北高電照菊研究会の皆さん

---

出品財 経営（花き技術・経営）

J A 北高 電照菊研究会（キク）

（代表者 大谷 虎次）

長崎県北高来郡

---

J A 北高電照菊研究会の組織の特徴は、脱サラ3名（タクシー運転手2名、農協職員1名）、家畜農家1名で専門的に花き生産を行うため組織が設立された。

毎月1回の定例会・現地検討会に基づく品質向上対策と綿密な生産計画により毎年目標を達成し、順調な生産の伸びを見せている。

栽培協定による技術統一と組合員家族全員の意思統一により、品質・選別とも優れている。また、出荷については全量共販となっており、市場との信頼関係も厚い。

施設の利用効率が高く（2.78回）、また、雇用の効率的活用により低コスト生産を実現している。組合員全員が認定農業者であり、また、家族経営協定についても3戸が締結済みで、残る1戸についても近日締結する予定となっており、他産業並の経営指向が伺える。

活動については、組合長を中心に全員が役員を分担して行われている。活動内容は、毎月1回の定例会・現地検討会を中心に、総会や出荷目揃会、市場研修、先進地研修、品評会等が実施されている。

1作当たりの出荷本数は26,000本/10a（植え付け本数の約60%）とやや低いものの、施設の回転率（2.78回）で十分に経営をカバーしており、年間を通すと72,460本/10aの高い出荷量を達成している。

市場の平均単価も66円/本と近年の単価低迷の中で高い水準を維持しており、市場での高い評価を得ている。

組織が地域に果たした役割としては、花きが全く生産されていなかった小長井町において、新規産地及び新規栽培者として4戸で平成5年に取り組みを開始し、まだ8年目にもかかわらず販売額は1億円を達しており、地域への波及効果が大いに期待されている。

組合員の2人は県の指導農業士であり、青年農業者の研修受入や地域花き生産及び経営についての指導助言・支援を行うなど、地域農業の発展に寄与している。

（推せん：長崎県花き振興協議会）

## 農林水産省生産局長賞 受賞者

---

出品財 経営（花き技術・経営）

田中 勲（シクラメン、ミニシクラメン、ニューギ  
ニアインパチエンス、カーネーション、  
ポット苗）

埼玉県上尾市

---

田中氏は、昭和40年、当時は埼玉県内ではまだ栽培の少なかったシクラメンを導入し、以後シクラメン一筋に自ら技術向上に努めている。それは昭和50年の全国シクラメン品評会で特賞の受賞に実を結び、それ以降も常に上位入賞を果たしている。また、氏は樹液による栄養診断にも取り組み、生育に応じた施肥管理を行うとともに、葉組作業を雇用労力を使って丁寧に行い、高品質でボリューム感のあるシクラメン生産を実現している。品評会での数々の入賞は、このような技術向上のための弛まぬ努力の賜である。

栽培技術の研究とともに昭和40年代後半からシクラメンの育種を始めており、花立ちの多い5号鉢に合うミニシクラメン系統を選抜している。オリジナルミニシクラメンの5号鉢は「ミニシクラメンは小鉢生産」の概念を変えるもので、市場でも高い評価を得て現在の経営の柱になっている。

田中氏について特筆すべきは、シクラメン新品種「プルマージュ」の作出で、平成12年品種登録の申請を行った。「プルマージュ」は花の中心が純白で花弁の外側が赤又は紫というこれまでにない花色で、しかも非常に美しい品種である。「プルマージュ」の作出は、花き業界で大きな評価を得、また、マスコミで取り上げられるなどし、低迷気味の花き業界の活性化に貢献している。

これらのことは、氏がシクラメンの生産技術向上と育種に長年にわたって情熱を注ぎ、それが優れた実績を結実しており、さらには「プルマージュ」の高品質生産技術の確立と次の新品種育成を見据えて努力されておられることは高く評価できる。

都市化の条件を生かしたシクラメン生産で、田中氏は、育種の目標を決めるにあたって、市場関係者ばかりでなく直売を通して消費者の好みを直接把握して、育種に役立てている。

また、20年以上前からクリーニング店のボイラーを利用した用土の蒸気消毒を行っていることやフェロモントラップの活用など、環境に配慮した生産の先駆的取り組みもしている。

これらは、氏が都市化した地域で生産を行っていることから、通常であれば不利な生産環境を逆に生かしているといえる。

田中氏は昭和57年の埼玉県シクラメン研究会の発足時に中心メンバーとして活躍し、後に同研究会の支部長や副会長を努めている。これらは、埼玉県のシクラメン生産技術の向上に寄与し、現在は二世会員に引き継いで活発に活動している同研究会の発展の礎になった。

また、農業委員、農協理事、町内会の会長等を歴任しており、それらの活動を通して市内の

緑化に貢献し、また、鉢花の手入れなど講習会の講師を努めるなど地域活動に積極的に参加している。

以上のように、田中氏のシクラメンを中心とした鉢物経営は、たゆまぬ品種開発と生産技術の開発による優れた経営であり、県内花き生産者の模範となるものである。

(推せん：さいたまの花普及促進協議会)

---

### 出品財 経営 (花き技術・経営)

林 富造・林 房子 (シンビジウム)

愛知県東加茂郡

---

林夫妻が農業を営む愛知県東加茂郡旭町は自動車のまち豊田市から 30 キロ圏内に位置する中山間地域である。林氏が山林経営を始めた昭和 30 年頃は、高度経済成長により、旭町の農家は町外の自動車関連企業に働きに出る人が増加するようになった。氏はこの風潮に反発し「農業でも会社員並の所得を確保する」をモットーに、新たに花き栽培に挑戦することとし、当時ではまだ栽培方法が確立されていない洋らん (シンビジウム) の栽培に取り組み始めた。

そして、条件不利地とされる中山間地での洋らん栽培を地域に適した品種の育成・導入により、労力の軽減、栽培期間の短縮を始めとした省力化と作業の効率化に積極的に取り組み、現在では農業所得 1,000 万円の家族経営を確立し、中山間地域での模範的な洋らん専業経営を実践するに至っている。

林夫妻の特筆すべき花きの技術・経営の特徴は、中山間地域でのシンビジウム栽培をオリジナル品種の育成・導入とともに先駆的に確立した点で、主な内容は、以下のとおりである。

山上げ栽培技術の確立による花飛びの回避と年内出荷の実現が上げられる。林氏は、花飛びの原因を花芽成長期の高温にあると考え、愛知県農業総合試験場山間農業研究所と連携して技術開発を行い、夏季に標高の高い涼しい地方に株を移動するいわゆる「山上げ栽培」の方法を考案した。現在では、この栽培方法により大量需要期である年内の出荷が一般的な技術として広く普及している。

オリジナル品種の育成による山上げの回避と生産の効率化を実現している。市販品種は、山上げをしないと花飛びが発生したため、旭町でも山上げせず花飛びを起こさない暑さに強く、開花の早い品種を育成し、中山間の気候を生かした年内出荷を実現した。現在、生産量の約半分をこの系統の品種が占めるとともに、山上げ労力を以前に比べ 50% に軽減している。

出荷までに 3 年かかる栽培期間の短縮に取り組むため、山上げを必要としない品種の中から栽培期間の短い品種を選抜し、さらにプラスチック苗の導入時期や冬期の温度管理を見直すなど技術開発に取り組んだ結果、平成 8 年には苗導入から 2 年目での出荷を可能にした。

かん水作業の省力化のため、昭和 50 年には全国に先駆けて頭上自動灌水装置をシンビジウム

栽培に導入した。その結果、かん水労力は、導入前の40%まで軽減でき、規模拡大につながっている。

旭町では、平坦地に比べると燃料の使用量は多いが、シンビジウムの生理に合わせた必要最低限の暖房方法を検討し、燃料の使用量の削減に取り組み、以前と比べると燃料使用は三分の一程度に削減でき、環境保全にも貢献している。

林夫妻は、お互いに共同経営者という考え方で経営を展開してきている。房子夫人の意見が、ベンチの改善や鉢の軽量化、労働時間や休日の取決めなど、作業の効率化と労働条件の整備に生かされている。

林氏が呼びかけのもと、花苗生産を行う有限会社「アサヒ・フラワー・センター」の設立に尽力した。これにより、町内の女性の雇用促進と花き生産による地域の活性化に貢献している。

以上のとおり、林夫妻の技術・経営への取り組みは、常に先駆的で、省力的な内容であり、しかも中山間地域の農業振興に貢献する活動は、他の模範となるものと判断し、推薦するものである。

(推せん：愛知県花き普及促進協議会)

---

#### 出品財 経営（花き技術・経営）

河野鉄博・河野常子

(施設花き：ランキュラス、マーガレット、ヨダマム、ガジュム他)

(露地花き：ガーデンマム、ラグルス、オダマキ他)

岐阜県加茂郡

---

岐阜県の鉢花生産は、昭和62年に全国初の広域鉢花専門農協「岐阜花き流通センター農協」を発足させ、全国への効率的販売網を確立し、現在は、全国第3位の生産量を誇るまで大きく躍進してきている。

河野氏も、こうした県全体の流れの中、自分の経営を見据え、着実な規模の拡大、法人化による経営の合理化、省力技術の導入を進め、平成7年には、富加町最初の認定農業者となるなど経営改善意欲が旺盛で、その堅実かつ安定的な経営手腕は高く評価される。

また、現在の不況期に独自の生産体系を持ち、常に施設の効率的な利用と共に、施設費を抑制するため露地の積極的な活用を行っている他、商品差別化を常に考えヨダマムやガーデンマムなど新種苗を日本で早期に栽培し生産体系を確立しているのも大きな特徴である。

こうした河野氏の前向きな経営方針は、他の生産者にも非常に刺激となり相乗効果として生産を盛り上げている。基幹品目はしっかり持ちその他の品目を組み合わせる技術は、これまでの研究と実績がなせる技で、市場からの注文が多いことがこれを裏付ける。

もう一つの経営の大きな特徴は、かん水の自動化と省力機器導入による作業の省力安定化である。海外の花き産業事情や国内技術をより敏感に感じ取る情報収集力が、早くから底面給水やプールベンチシステムなどの導入を実現させている。

現在でも、問題となる土壌病害などの発生は、プールベンチシステムにより回避し、栽培環境の設定が適性であることを伺わせる。これは、技術と省力の両立を得た結果である。

加えて、作業効率化・省力化を強く進める経営方針にパソコンを利用した経営管理がある。細かな経費把握や出荷先検討など日々のデータの蓄積に基づいた早期の適正な判断が、毎年の販売額の向上を可能にしている。

鉄博氏は、地域の代表として、平成8年から岐阜花き流通センター農協の理事を努めているほか、富加町の花のアドバイザーとして緑ある地域、心のゆとりを感じる生活を広めようと活動している。特に、町民の集まる役場周辺の花飾りには、妻とともに活動の中心を担っている。

そのほか、富加町の農業者の集まりである「愛農会」では、理事として地域の農業の活性化に尽力している。

最近では、新たに富加町全体を考える「まちづくり協議会」に参加しており、これからの住み良い街作りを考えていく活動を行っている。

また、農業大学校からの3名の研修生を引き受け、全員を将来の有望な若手生産者として育てあげている。

常子氏は、法人化を契機に役員として販売・経理部門を受け持ち、経営の中心的役割を担っている。平成8年度には、岐阜県女性農業経営アドバイザーに認定され、農業をより多くの人に理解してもらおうと共に、農村女性の地位向上に努めている。また、岐阜花き流通センター農協では、婦人部の役員を努めたり、富加町の農業婦人クラブや農協の婦人部にも積極的に参加し、その行動力から今やリーダー的な存在にある。

このように、鉄博氏の経営手腕と積極的な地域活動は、岐阜県の花き生産を代表するものである。また、常子氏は、経営の発展に重要な役割を果たし、仕事分担の明確化がより積極的な活動を実現している。

河野氏夫妻は、こうした優れた実績はもとより今後の活躍がますます期待され、他の農業者の模範として高く評価される。

(推せん：花の国づくり岐阜県協議会)

---

出品財 経営（花き技術・経営）

菖蒲 正行

（トルコギキョウ，チューリップ）

佐賀県佐賀郡

---

菖蒲氏が花き栽培を始めた頃は、花き栽培を詳しく教えてもらえる相手がおらず、これまでの野菜栽培等の経験を活かしながら、手探りで栽培を行った。以前栽培していたトマトでは、良質な果実を収穫するために花を咲かせることが重要なポイントであったが、この経験が、トルコギキョウを正常に生育させることに非常に役立った。また、トルコギキョウの優良系統の選抜については、パセリの自家採種を応用し、個人ブランドを作出している。

栽培上で重視している点は、均一に生育させることで、花き栽培では、特に重要な技術である。そのため、育苗期間中は、温湿度管理に十分に注意を払い、常に最適な状態で管理し、斉一な健苗育成を行っている。また、本圃の畦は歪みや凸凹のないように作り、定植後は、灌水ムラから生育差が生じるのを避けるために、1ヶ月間は手かん水を行うなど丁寧な管理をしている。

肥培管理については、肥料で作るのではなく、地力で作ることに重点を置いており、良質のバーク堆肥又はモミガラ堆肥を毎年10a 当たり16m<sup>3</sup>投入している。併せて、元肥を減らし、生育に応じて液肥で追肥を行うことにより、過剰施肥を無くし、品種特性を十分発揮できるような理想に近い状態で生育をコントロールしている。

菖蒲氏が栽培したトルコギキョウ「エースホワイト」は、花梗や茎葉が硬く締まって草姿が整っており、ボリュームも十分で、第35回佐賀県花き園芸共進会の出品物148点の中で最高の農林水産大臣賞に選ばれた。

栽培技術については、周囲に花き生産者が少なく、十分な情報が得にくい中、過去の野菜栽培の経験を生かし、独自にトルコギキョウとチューリップの周年栽培体系を確立するなど優れた点がある。

経営についても、年間を通して雇用労力を導入するとともに、作業が集中する時には、種苗センターに育苗を委託するなどして、労力の軽減を図り、ゆとりある農業を実現している。

また、来年就農予定の後継者を花市場で研修させて消費動向の把握に務め、経営の参考にしている。

その他にも、環境に配慮して食品残さを利用した堆肥を積極的に利用したり、地域振興組織である菖蒲振興会の役員を努めるなど営農面以外でも旺盛な活動を行っており、「花き技術・経営コンクール」の出品財としてふさわしいものである。

（推せん：佐賀県花づくり推進協議会）



## (財) 日本花普及センター会長賞 受賞者

---

出品財 経営 (花き技術・経営)  
中 辻 栄 治  
(施設花き及び露地花き：輪ギク、  
コギク、2輪ギク、スプレーギク)  
奈良県吉野郡

---

中辻氏が住む吉野郡下市町は、県内有数の伝統的な花き産地であり、キク・バラ苗の生産が行われている。平成12年の作付面積は、およそ14ha、栽培農家数は59戸となっている。

なかでも阿知賀地区はその産地の中心となっており、同氏も就農以来一貫して大中輪ギクを生産してきた。

氏は、当初、地区の他の生産者同様露地栽培を行っていたが、出荷時期・作柄の安定化を目指して、雨よけ栽培に取り組み、次いで電照栽培を取り入れた。また、最近ではいちはやく無側枝性ギクを導入し省力化に努めるなど経営改善を進めてきた。

露地栽培では、出荷時期が偏ることや、病害が発生しやすいことなどからビニールハウスでの雨よけ栽培に取り組み、現在では、栽培面積の約80%を占めている。

雨よけ施設導入後は、さらに出荷時期の長期化・平準化を目指して電照栽培を導入、徐々に拡大した。現在、作型の組合せにより5月下旬から12月いっぱいまでの長期安定生産を実現している。

夏期出荷の品種として「精雲」を栽培していたが、省力生産を目指して、品質や市場性も考慮したうえで、早くから無側枝性ギク「岩の白扇」への切り替えを進めた。現在では、氏の出荷品への市場の評価・信頼も確立され、主力栽培品種となっている。

県農業関係機関や農協との協力・連携により、将来の省力化技術の核となると目されるキク自動定植機械の展示実証試験を担当するなど労働負担軽減にむけた取り組みにも余念がなく、また、雨よけ栽培導入により病害発生を低減し、虫害についても、予防散布と入念な観察によって薬剤散布回数を抑えている。

今後の改善点として、シェード・加温栽培の導入により更なる出荷期拡大と平準化に努めることにしている。

氏は、キク生産農家の研究組織である南和花卉園芸組合(組合員35名)の役員として、特に技術面で産地をリードしており、出荷市場を地元奈良県花き植木農業協同組合に絞って、蜜に連携をとりながら消費動向の的確な把握に努めており、新技術・新品種に常に目を配りながら、品質向上に務め、消費者ニーズにあった栽培に取り組み、下市町キク産地の牽引役としての功績は大きく、ここに推薦する。

(推せん：花の国づくり奈良県協議会)

---

出品財 経営（花き技術・経営）

石田 律 恵

（施設花き：ブルースフラワー、ブルースプレー、  
カスミソウ、ラグルス、ホワイトペール、ナ  
タリー、キャンディタフト、スモークグ  
ラス、チドリソウ、スモークパニカム）

（露地花き：ハボタン、ラベンダー）

広島県呉市

---

石田氏の住む呉地域は、明治末期の頃から花文化が発達していた地域で、花栽培も盛んに行われていた。戦後も進駐軍の花需要から始まって、現在でも小菊、ストック、トルコキキョウ、カスミソウ、切花用ハボタンなどが栽培されている。その中で石田氏は、呉市天応地区において草花生産約 35a の営農に励まれ、地域リーダー的存在である。

ご家族のご不幸や圃場条件の変化などたくさんの苦労も経験されて、女手一つでこれだけの農業経営を維持し、また、生産組織、販売組織のリーダー、県内でも数少ない女性の農業士もされ、地域社会活動にも積極的に取り組まれている。

また、少量他品目の草花生産は、大量生産、大量流通時代の中でユニークな経営方法かと思われる。花屋の経営もされ、フラワーデザインの造詣も深く花の使用方法や新しい品目の情報もいち早く採り入れられ、栽培に生かされている。栽培技術も高く、新しい技術も積極的に取り入れられ、また、チドリソウの周年出荷技術など自らも技術開発をされている。1 畦単位での作付けや株ごと抜き取る収穫方法なども労力配分や省力化に配慮された独自の方法かと評価される。

消費の低迷により、花き業界全般に厳しい状況下の中ではあるが、平成 13 年 3 月には呉市の認定農業者に認定され、現在、経営改善計画の目標にむけて意欲的に取り組まれている。

（推せん：花ロマンひろしま運動推進協議会）

---

出品財 経営（花き技術・経営）

阿部 雅志

（施設花き：シンビジウム鉢物）

（露地花き：アスター）

徳島県板野郡

---

阿部氏は、当初、レタスなどの野菜栽培を行っていたが、花き栽培の技術も習得しており、経営転換をしてシンビジウム切花の生産に携わってきた。その後、シンビジウム鉢花生産に転換し、長年の経験による技術を生かして高品質花き生産に努めている。その技術は、全国でも1・2を誇る組織の徳島鉢物洋蘭振興会会員中トップクラスである。県花き展示品評会においても農林水産大臣賞や県知事賞を受賞する等、シンビジウム鉢花生産では群を抜いた存在である。

栽培技術面では、作業の効率化・低コスト化に向けた設備及び資材の導入やロング肥料等の使用による施肥の省力化などに積極的に取り組むと共に、安定した農業経営のため、栽培開始当初から青色申告を行っており、パソコンを利用した簿記記帳にも取り組むことで、経営内容の把握と改善にも努めている。

また、地域では、初期からの認定農業者として後継者や産地育成のために尽力しており、同輩・後輩の人望も厚く、本県を代表する花き優良経営者であると認められる。

（推せん：徳島県花の国づくり推進協議会）

---

出品財 経営（花き技術・経営）

森 崇（バラ）

香川県大川郡

---

森氏の経営の特徴としては、早くからガラス温室を整備し、高品質バラの生産を図っている。また、平成2年からロックウールの養液栽培や選花機、無人防除機を順次取り入れており、かん水作業や施肥管理作業が大幅に軽減され、省力化が図られることにより、規模拡大につながっている。さらに、アーチング栽培のため、せん定や芽の整理などの一般的な管理作業や改植時の土壌消毒などの省力化を積極的に図っている。

また、パソコンによる記帳も行うなど、経費管理などの経営分析も積極的かつ省力的に行うようにしている。

さらに、香川県バラ切花協会の会長を9年間努めるなど、県下のバラ生産農家のリーダー的役割を果たしている。また、県下の花き品評会など生産振興に係る行事にも積極的に参加し、

香川の花き生産の発展に尽力を注いでいる。

以上のとおり、森氏の経営・技術は、常に先駆的・合理的な内容であり、他の模範となるものと判断し、推薦するものである。

(推せん：花の里かがわ推進委員会)

---

出品財 経営（花き技術・経営）

高 柰 義 邦

(施設花き：テッポウユリ, 電照ギク,  
フリージア)

(露地花き：テッポウユリ球根)

福岡県福岡市

---

高柰氏は、電照ギクの無摘心栽培や環境に配慮した点滴灌水施肥栽培システム等の新技術に率先して取り組み、技術の確立を図ってきた。その上で自らの技術を周辺農家に積極的に公開した点で地域の花き振興に果たした役割は大きい。

高柰氏は、給与の取り決めや休日設定を示した家族経営協定に積極的に取り組みゆとりある農業を実現している。さらに、県の指導農業士として、後継者の育成、県の施策への提言、特に家族経営協定に率先して取り組み、地域において多くの協定締結を成功させている。

また、退任後も、福岡県花卉農協理事として、若い後継者や後継者夫婦に対し協定締結の推進を図り、更に、既に協定締結後の相談にも乗り、形式的なものではなく実行力のあるものとして推進している。

このように、家族経営協定を地域だけにとどまらず県全域にまでひろげており、県全体の花き生産者の労働環境改善に果たす役割は大である。

(推せん：福岡県花の国づくり協議会)